

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本人の言語習慣
Author(s)	'
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集，1989：127 - 142
Issue Date	1990-03-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039273
Right	
Relation	



日本人の言語習慣

Cécile MARIE

学習院大学の教授である木下是雄しの定義によると、「言語習慣と呼ぶのはこいう「ものの言い方」、もう少し詳しく言えば、国により人種によって違う〈言語表現のパターン〉のことである。」(1)つまり、ここで私が研究しようと思うのは、どうしてある決まった状態において、違った文化の二人が違った表現の仕方を持つのを示すことである。どういう風に彼等の物の考え方は異なっているのだろうか。

その説明は言語学による問題だけではなく、心理学にも、社会学にもよるということを示したいと思う。別の言い方すると、異文化コミュニケーションにおける言語習慣の与える役割について交際する・言語習慣はもちろん文章表現の上にも表れるが、ここで話題を口頭表現に限定する。

さて、どういう風にこの研究を行なったかについて一言記す。専門家出はない私歯、まず、理論の面では言語学者、心理学者と社会学者の研究に基づいて、実践の面では、自分の経験（誤解したことや聞いたことやインタビューなどで）に基づいた。内容についてまず日本語の語源の歴史的な議論を簡単に述べてから、現在使われている日本語の主要な特徴を検討する。次に具体的な例を通じてその特徴をフランス語の言語習慣と比べて、その違いの原因について交際する。最後に、言語習慣の定義、また一般的なコミュニケーションにおける言語習慣の重要性を示したいと思う。

I. 日本語への日本文化の影響について一言

日本人は中国人、韓国人と同じようにモンゴロイド人種に属すると言われる人が多い。パリの東洋語学校 (INALCO) 教授である René SIEFFERT 氏による、実際には、日本語はアルタイ語族に含まれ、韓国語やモンゴル語はトルコに由来する。また日本語においてはマライーポリネジャ語の影響の形跡が見られる点もあると言われる(2)。しかし、日本語が書かれるようにたったのは約八世紀のことなので、それ以前の日本語の研究を行なうのは難しい。加藤周一氏によると、現代の日本文化は徳川時代(1615-1867)からふたつのことを継承している。それらは武士道の価値観と団体意識である。つまり、生まれた団体を意識し、ずっとその団体においてしか生きていけないということであった。その結果として、その時代の社会階級構造が非常に強化されて、全ての間人間関係はその縦関係によった。そのために日本語は元から、形式的な言葉で、インド・ヨーロッパの言葉が語尾で表す概念は日本語では文脈で、あるいは、いわゆる「儀礼的な文句」で表す。それは1868年までに非常に発達した社会階級制度をよく表していると考えられる。

1868年から「国を開く」ために文学は政府の道具化されて、文語代わりに俗語を官用化し、京都に生まれた文語の代わりに東京の方言を標準語にしたという(4)。

しかし、1945年日本で行なわれた著しい近代化と民主化のために表現の仕方においてたくさんの変化が起こり、その「儀礼的な文句」のもとの意味も段々なくなったわけである。

その昔の考え方とその社会階級制度から多くの世代を通じて伝えられた表現の仕方、コミュニケーションの仕方を追って、その特徴を交際しよう。

I I. 日本人の言語習慣の特性

2. 1. 相手に対する思いやり

「日本的な対応はもっぱら相手の立場を立てようー相手の気分を害指せないように、少しのことならことごとく言い立てずに相手二同調しようーとする配慮に重点がある。これ対してフランス的対応では、そんなことに願慮せずに、本心のまま単純・率直に答えようとする」と木下氏がいつている。

(1).

また具体的な例を述べている。敗戦後何年か経って欧米の研究者との直接の付き合いが始まったころ彼は、彼らを案内して、一日歩いてた後で「お疲れじゃありませんか」とたずねて、「はい、くたびれた」と言う真正直な答えにアツと思わされた。日本人なら、よほど親しい仲であれば、いざ知らず、初対面に近い相手に対しては、「疲れた」と答えては一日中案内してもらったのに、〈わるい〉から「いいえ、別に」とか「いくらか」とか答えるだろう。(1)

実は日本人とフランス人の対応の目的はある程度違う。

以前に述べたように普通は日本人の対応は相手を害させないように、相手に喜ばれるようなことしか言わない。その目的は互のコンセンサス、調和に達することである。

KAWASHIMA Takeyoshi が述べるように日本人にとって調和と言うものは区別をなくすことであって、良いことと悪いこととの間の区別が出来れば、それは「和」と言うものはないと言う意味になるといつている。フランス人の対応では先ず、大切なのは相手に言いたいことを合理的に伝えることで、その伝えたことの論理性を納得してもらうことである。(4)

日本人は相手をく困らせないように>ウソを言う時もある。例えば贈り物をうけとらないお客さんに、よく家庭の主婦は「主人がそう申しますので・・・」と言うこともあって、そうするとお客様は断れないのである。

しかし、私の目から見れば、ある場合にいはあまり相手の方バツカリ考えると逆の結果になる危険があると思う。

例えばこの間、私の日本人の友人に電話して、気にたっていたことについて話し始めたら、しばらくすると、何だか彼女は私の言っていることをあまり聞いていないような気がした。その時に話を切つて「どうしたんですか、カヤコさん、聞いていますか」と確認すると「はい、聞いていますが、ちょっと悪いんですけど、お手洗いにいきたいんです。。。 」と言う答えが返ってきた。その時に笑った私があまり喜んでいなかった。私に対して〈わるい〉からと思った彼女は、互いの時間を無駄にして、自分は電話で長話をして、彼女を困らせしまったためなのだ。フランス人なら、とくに友達なら、きつと遠慮なく、すぐに「ちょっと、お手洗いにいきたいからすぐ後で電話をかけるよ! 」と言うかもしれない。

別な時に仕事の関係で電話を受けて、相手と色々なことについて話してから、約束を取つて、一緒に食事をしたことである。実は彼女は本人ではなく、けれどもその友達だということを食事が終わるころにその人が言つた。その時は何だか騙されてしまった気がして、この人のことが恥ずかしいと思つた。

また日本人は否定の答えも、直接の拒否もしないことが多い。

相手の意見に「いいえ」と答えればある意味で彼を人間として認めていないことになるので、その関係はなくなると MIZUTANI 氏が述べている。(5)

そう言う意味で「そうですね」とか「はい。。。はい。。。」という文書も相手が賛成していると言うことになるわけではない。ただ彼は聞いているということである。

そのために相手の正直な意見を知るのは難しい。「そうですね。。。」とか「うん。。。難しい」とか「出来ないわけじゃありませんけど。。。」と言うようなためらいの答えなら、大抵相手の否定の答えは明らかになるだろう。

同じく、日本人は意見を表す時にあまり主張しない。例えば約束ヲする場合、相手の都合を聞くと「いつでも結構です」と答えるが、次に「だかど金曜日にはちょっと。。。」と答える場合もある。もう一つの例を挙げると友達に「奥様まだ英語の学校に通っていらっしゃいますか」と尋ねると、「ええ、今でもいっているようです」と言う答えが帰ってきた。「。。。ようです」とは何だろう。最初、相手の聞手にたいして憎しみがあるのか、自分の奥さんに対しての無頓着さを表しているのだと思ったが、実は、日本では、特に自分の家族について話する時の「まあまあ」とか「そうかも知れませんが」と同じような謙遜を表しているのだということが分かった。

また応対においては、相手の立場に合わせた「儀礼的な文句」を使わなければならない。「下さる」、「いただく」、「おっしゃる」などのような動詞はフランス語に同等の言葉はない。(それはフランスに社会階級の違いはないと言う意味ではないが、その違いは言葉そのものにあきらかではない。むしろその口調に表されている。)

木下氏によると日本人の間デハ討論というものが先ず成り立たない。討論は相手のいうことを隅々マデ聞き取って質すべきところは質し、意見の合わぬところは言葉をすくして反論する。相手はまたその反論耳を傾け、自分の考えとの相違を分析した上、相手を説得しようとする—という過程を繰り返して結論に近づいて行くものだが、日本人の場合は、大抵ひと合戦だけでおわってしまう。何かの理由で片方があいての主張をむか、あるいは一方が相手を「話しにならぬことを言うやつだ。」と思って、説得を諦めるか、どちらかである。フランス人である私は討論が好きだが、やはり日本人とある問題について(特に相手やその国に関することについて)話すコトハ難しいだと思った。実は何回も日本とフランスを比べて、理解するために日本人と話したら、節度のある話し方しても、私の言いたかったことは批判として考えられてしまって、相手は怒ってしまった。

また日本人の応対はあまり合理的ではなく、感情的である。この間日本人学生と外国人とで 'English camp' に参加して、その時に六人のグループで脳死 (brain death) という話題について討論をしなければならなかった。話題は非常に難しかったが、意見を持つために科学者である必要はないと思う。実は私は日本人の学生の反応に驚きました先ず最初は誰も発言しなくなかったようなので、一人一人に意見を聞いた。フランスなら逆に皆同時に発言したり、はやく考えないときっと話す番もなくなるんじゃないかと。。。) 話し初めても急に黙って、話しを続けられなくなったり、又何人も

賛成して、全く不思議と思わずに矛盾を表しました。例えば「脳が動けなくなった時は人は死んだと
考えても良いですが、また人は真だ死んでいないという意味になる場合もある。それは患者による。
和ついの家族の一人なら死んだと認められないと思います。。。」とひとりが言った。結論として誰
かがつぎの事を言った「まあ、こう言う風に考えても良いし、こう言う風に考えても良いと思います」
とても民主的な討論だと思った！

2・2・儀礼的な表現の仕方。

先ず日本人は敬語（尊敬後、謙遜、丁寧語）を多用する習慣がある。フランス語には敬語表現が使用
頻度はるかに少ない。木下氏の例はよくそれを示す。

「。。。日本からの国際線を飛んでいる米国機のなかの話し。。。突如、機が揺れ初め、一度やん
で、また揺れ始める。それが、二、三度続くと座席の前上方の「シートベルト締めよと言う文学にラン
プが付き、次いでスチュワーデスが「ご自分の座席に帰ってシートベルトを締めて下さい。前方に気
流の乱れがあるようです。」と放送する。もしその飛行機に日本人スチュワーデスが乗り込んでいれ
ば、その後にご搭乗機の前に気流の悪い所があるようでございます。おそれいりますが、お座席
にお戻り担って、シートベルトをしっかりとお締めください」と言う日本語の放送がつづく。」(1)
その例において事務的なフランス語の放送と丁寧な一いささか丁重すぎる日本語の放送と比べると大
分違う。

又日本語にはお礼か謝り方かわからない表現が多く多い程、初めて日本に来る外国人にとってど
ちを選べれば良いのか分からない。その表現はそれぞれの微妙な差違があつて日本語の感情の表方の
豊かさをよく示していると思う。例えば感謝の気持ちを表す時に「どうもありがとうございました」、
「同もあり阿東ございます」（フランス語の " merci beaucoup" その同等のものが、その日本語に
含まれた時制はない）。

又何かもらう時、それとも食事の始まる前に「いただきます」と言う（直訳：je vais recevoir v
otre offre意味：bonne appétit;merci）一人で食べても言う。食事が終わってから「御ちそう様で
した」も言う（le repas était délicieux）。

その時も食事が出来たための全ての人に対して、全ての物に対しての感謝がある。「すみません」
と言うのは謝りも、感謝も表す（感謝を表す場合は " je suis confus" という意味で。長い間私は
「ごくろうさまでした」と「おつかれさまでした」は同じことと置いていた。しかしかなり違った
意味を持っている。初めて広島に来た時適当な住む所を見付けるのが中々大変だった。それをよく覚
えていて下さる一人がおられる。。。お世話になったのは生協の奥さんだった。ある日長い間にお世
話してもらったり、車でご案内してもらったりした私は「どうも、御苦労様でした」と別れる時に彼
女に言って、「アア、本当にあなたはユーモアがある人ですね！」と笑いながら言われた。

次の日は理解出来た。実は「御苦労様でした」というのは相手の世話は当たりまえのとき、自分の位
置は相手の位置よりも上だと考えられる。例えば冷蔵庫を直しに来てくれた係員にお礼を言うとき
（c'est du bon travail, merci）。逆に「お疲れ様でした」というのは私に対して相手の世話は義務
的でない時、別に相手と直関係はないし、相手と同じ位置だと考えられる（merci pour tout le mal
que vous êtes donné, vous devez être fatigué）。

「それは、それは」驚いた時), (je ne sais comment vous remercier! je suis sans voix! en voilà une surprise par exemple!) 「おじゃまします」、「おじゃましました」、「失礼します」、「失礼しました」というのは誰を訪ねて行く時 (permettez-moi de vous déranger ; excusez-moi de vous avoir dérangé)。

「申し訳ありません」は自分で謝るために使われている (je suis désolé)。

又、色々な挨拶の仕方がある。長い間私は「今日は」は「bonjour」の同等のものと思って、何回も大学の教育学部学務室へ入った時に言った。人々は私の方を変な目を見た。何も返事がないので私は「なんて失礼なひと達」と思った！ MIZUTANI氏の説明を読んで「お早うございます」以外は「今日は」か「今晚は」は、あまり丁寧ではないので普通は「他人」と使わないし、内のひとか事務所の人々とは状態によって使われている。(5)

「さようなら」も上のひとに対して使われていない。その代わりに「失礼いたします」、友達なら、「じゃ、また」、「お先に」などを使うと言う。

同じように「お元気ですか」はフランス語の 'comment allez-vous?' ではなく、病氣から回復した後、またある理由で人々が心配してくれる時に使う (allez-vous mieux?)。また、「いかがですか」、(comment allez-vous?) 「どうですか」 (comment vous sentez-vous?) も毎日会うひとには言わないで久しぶりに会う時とか、その人の生活に大きい変化があった時に聞くわけ。それよりも、「行ってきます」とか「行ってらっしゃい」は家を出る時とか内の人に道に会う時とか (j'y vais, à ce soir) と「いただきます」 (je suis de retour), 「お帰りなさい」 (bonsoir) は親しみ表す。

また、日本語の儀礼性をよく示すことは、人称代名詞がほとんど使われていないということである。例えばどこかの社長さんに話していると「あなたはどこに住んでいらっしゃいますか」とはきかないで「社長さんはどこに。。。」と聞くべき。この例のとおりに入称代名詞よりもその人の地位 (社長、奥さん、先生、お母さん等) か、その人の名前を使う。「あなた」の使い方は非常に限られている。じぶんよりも年下の人に、同じ年の女性の間で、それとも、男なさんに対するあまい呼び方がある。

「私」もフランス語の文書に比べるとあまり使われていない。日本語では文脈によって主語を分けるのである。

それは日本人のグループの依存性と、フランスの独立性を表すと思われる。

土居健郎氏によるとその依存価値観は、ある極端な場合は「甘え」の意味になる。つまり、その依存性は受動的に愛されたいと言う希望である。この概念の発見者である土居氏によって、それは日本社会を理解する中心的な概念である。(7)

そのグループ依存性を説明するためにまた仕事の関係以外にもう一つの例を言うと、一人で旅行するのは珍しいと言う。一人で旅行する人は、特に女性であれば、「変な人」と思われる危険がある(8)。

初めて日本に来た時に人々によく「お一人で来られたんですか」と聞かれて、「はい」と答えれば、いつも相手は驚いて、感心を含めて「ええ、スゴイですね」とこたえた。フランスでは早い時から、皆よく旅行する。”Les voyages forment la jeunesse” (旅行と言うものは若者を作る) と言う諺があって、そのために一人で、年齢関係なし、旅行するのはおかしくもない。

又、日本人は知らない人に (つまり、「私達のグループに属していない、他人」に) 直接に話し掛けない。例えば誰かに紹介される場合は、相手は紹介された人のことを聞くと、その人を紹介して

もらった人に間接に聞く傾向がある。日本人にとって礼儀正しいことと思われるが、フランス人にとって非常に失礼な事である（子供か頭が悪い人としてあづかわれている気がする）。

又、私達の目から見れば、もっと不思議なことと思われるのは、困った知らない人にも救いの手をさしのべないことである。これは何回も経験したことである。例えば、初めて広島に来た時に道を歩行者に聞いたら優しく連れていってくれた人もいたが、最悪の場合は、相手は驚いた顔して、英語で「I donto speaku english」と日本語で聞かれた質問に答えて、急いで（私は化け物のように見られて）、逃げ出したことは珍しくなかった。しかし、「他人」のことを全く無視する例も毎日の生活に見られる。日本人の冷やかな話し方よりもその、ある程度に一般的な利己的な行動遍キリスト教の教育を受けた私にはそのことに慣れにくい。例えばある日、昼ごろ、かなり人が多い時間い、本通りを歩くと、かたつばの靴しかはかないで、破れた服を着ていた女性を見た。彼女は歩きにくく、おそらく誰かにアタックされたらしいのであった。回りの人々も皆彼女が通りがけると、振り返ったが、一人も助けなかった。自分は、どうして良いのか分からなくて、あまり驚いて、何もしなかった。

又、キャッシュカードの前にある店の入り口に立って、私は番を待ちながら、人々が入ったり、出たりするのを見ていて、誰も後に来る人にドアを手でささえて開けておかないので、ドアはかなり重かったために、一人のお祖母さんの顔にほとんどぶつかった。その時ショックを受けて、私の目には怒りの涙が浮かんだ。フランスなら、先ずかならず、次に来る人を待ったままドアを手でささえて、相手はちゃんと“Merci”（ありがとう）と言う。又電車に乗るためにお互いに押し合いへし合いしたり、電車の後文からその前文に行きたかったら、また何も言わずに人々を押す。フランスなら、かならず人の前か、人の後ろを通る時にどこでも、何人いても、皆さんに“Excusez-moi”（失礼します）、“Pardon”（ごめんなさい）、“La porte s'il vous plait!”（ドアをお願いします）という。すると、相手は道を開けてくれて、彼を押す必要はない。そして、もし無意識に人にぶつかったり、足を踏んだりしたらすぐに“Excusez-moi”（失礼いたしました）と言って、普通は相手は“Ce n'est pas grave”（何でもありません）と答える。別の時に、何回も座れなかったお祖母さんか、お爺さんに私の席をゆずったことがある。

日本語には謝る言葉も感謝の言葉がたくさんあるのに、どうしてそういう場合には使われていないのだろうか。。。最近TVにアナウンスが出て、電車に座っていて、お互いに邪魔をする人々がいる。その場面を見ている犬は「人の迷惑を考えよう！」という。

こういったことにたいして木下氏はこういう事を言う「。。。日本人の発言はしばしば親切過剰（お節介）でいたずらに世の中の騒音レウエルを高めているきらいがある。「間も無く電車がはいります。あぶないですから白線の内側へ下がってお待ちください」と言う駅の放送はその一例で、大人を子供扱いにしている」と述べている。(1, 9)

こういうことはフランスで考えられないことで、一般的にするべき事を他人の人に言わせたくないし、特に自分で分かっている基本的なことの場合。それから知らない人とかかなり話し安いのである。電車の中でも、喫茶店の中でも、道でも、どこでもほとんど（もちろん例外があるけど。。。）人々と付き合いやすいのである。

また日本人はよくお世辞を言う。ある場合も意味はない。ただ習慣で皆に使われている、決まった表現である。例えば、よく聞いたことであるが、奥さんが自分の夫について人の前にモンクを言うこともある。その時に相手はかならず「内はもっとひどいですよ」と言うようなことを言う。もちろ

(8)

ん誰もそんなことを信じないし、すぐ忘れることである。もし相手がフランス人なら、きっとそんなプライバシーのことを聞いて驚いて、同情すれば夫を叱るかもしれない。

同じように知らない人に「始めまして」とか「どうぞよろしくお願い致します」の位の事を言うと、「まあ、日本語お上手ですね」と言われるその時ももちろんバカにされた気がするが、ニコニコして「いいえ、そんなことはありません」と答える。しかし、こういううまらないと思われる文書は役割を与えるのである。つまり、挨拶と同じように考えてもよい、その二つの例の通り、相手のこと知りたいというよりも、ただ一つのコミュニケーションのボタンである。

前にのべているように、そういう意味で日本語は儀礼的な言葉であると言える。

しかし、場合によって、その決まった話し方、表現は非常に相手とのコミュニケーションを容易にする。先ず、以上に述べたように相手の方に近ずき安い、また感動する場合も、便利な表現である。例えば日本人はスピーチが上手であるが、フランス人はにがて、特にグループの前でならば。別の例を言うと、自分のフランスの大学の先生にお例を言いたい時に適当な言葉が見つからない場合、(あまり丁寧過ぎると、大げさなことと思われて、笑われるか、私の誠実さを疑われると思うから。)その時に日本語で表現出来ればいいと思う。

けれども、逆に日本人はグループにおいて簡単に話しをするが、その属しているグループでない人には話しにくい。だから、落ち着くために相手と話し合いがしたい。その話し合いはよく聞かれた「お国はどこですか」「日本料理は食べられますか。」、「にほんは好きですか」のような質問である。それを分かって、やはり今でもよくこういう質問を聞かれると、いらいらして、「やめてもらいたい」と思ってしまう。その考え方をよく知らないフランス人なら、こういうような質問でバクハツされると、特に初めて人に会うとき、驚いて相手はかなり「失礼」だと思って、その時にきっと話しを切るためには「あなたは警察の人ですか」のような冗談を言うかもしれない。

またよく聞くことだが「どちらへ」と聞かれると「ええ、ちょっとそこまで」と答える。初めてそれを聞いた時、二人の中はよくないと思った。一人は関係ないことを聞く、もう一人は無視して“Cela ne te regarde pas”(あなたと関係ないだろう)と答えるからと思った。また「お元気ですか」と「ええ、おかげさまで」について最初は、「私はどのような関係でしょう。。。。」と思った。別の例を見ると、この間私の日本にいる姉に電話して、彼女と話した事のなかった私のそばにいた友達に急に変わると「始めまして、いつもお世話になっております。どうもありがとうございます。」という最初のことばを彼女が言った。その時に、姉と私「まだお互いに一度も会ってないのにどうして。。。。」と思った。

また初めて日本に来たときに、しばらく姉の所に泊まって、いつかお客さんが来た。その時にお手洗いは一階にあったのである。二階の客間で話ししていると急にお客さんが立って「お手洗いは。。。。」と聞いて、よくその意味知らなかった私は「手を洗える所」まで、つまり二階のお風呂場まで案内してしばらくして、彼は真っ赤な顔、困ったらしく戻ってきて、私にその説明してくださった。

又、この間私にフランス語を習いたい人に会った。話していると急に彼は「実は。。。お礼をしなればなりません。。。。」と言って、私はよく分からないで「いいえ。。。どうしてですか」と自発的に聞いた。彼はびっくりして「でも、マリさんにフランス語を習えば、ちゃんとお礼をするのは当然なことではありませんか」と強調して、その次に「お礼」のことは「給与」を指すと説明してくださった。

2・3・感情を明らかに表さないこと

又、西洋人よりも日本人は感情を言葉で余り表さないし、肉体的にもあまり接触はない。例えば、アメリカで卒業した一人息子である私の友達は、日本に帰る時にも、日本を出る時にも、長い間に両親に会えなかったのに、フランス人のように、抱き合ったり、キスしたりしないし、ほとんどそのお互いの気持ちを表さない。そのかわりに「疲れましたか」、「向こうは、何時にでたの」、「おなかですいているでしょう」と言う様なことしかいわない。「Mon chéri, comme tu nous as manqué !」、
「Ah ! te voilà enfin de retour !」、のようなことは言わない。

又、何人も夫婦にインタビューすれば「朝にを覚めた時の相手へノ最初の言葉は。。。 」と聞くと「おはよう」という答えが多く、次は天気のこと「今日は雨だね。。。 」という答えもあった。また、何も言わない人もいた。フランス人ならよく感情を表す。先ず、子供の時から、朝起きると両親の所に行き、「 Bonjour 」と言って、キをする（家を出る時も、家に帰る時も）夫婦なら決まった表現は使わない、甘い言葉を言いながら（よくかわいい動物の名前を使う）、肉体的にも愛情を表す。

（“ Bonjour mon lapin, tu as bien dormi ? ”）

2・4・コミュニケーションの形

日本人はフランス人のコミュニケーションのし方は違う。というのは全く同じことの言い方はたくさんあって、同じことを言っても、それから同じ言葉を使っても同じ意味が表せるわけではない。その形によって相手に当たえられるインパクトは大分違う。

日本語で先ずあいづちがある。私は何年間も日本語勉強したが、あいづちを使えるようになるまでがかなり時間がかかったし、フランスの大学習わなかったのである。そうすると初めてあいづちのことを聞いて驚いた。例えば①「先週は海へ行ったら。。。」、「ええ、ええ」、②「水はきれいだったんですが」、「そうですか」、③「人が大勢で。。。」、「そうですね。。。」。そのような日常会話においてはあいづちは非常に大切な役割を当てる。日本人にとって、相手が聞いて、話しが続けてほしいという意味である。あいづちがないと相手は落ち着かない。電話で私の声が聞こえなくなった相手はよく「モシモシ、モシモシ、モシモシ。。。 」と恐怖したような声で言った。フランスではまた逆のことである。先ず相手の話しを遮るのは非常に失礼で、最後まで黙って聞くべきである。

だから例いよると最初の答えは驚く。文書が終わっていないのにどうして “ Oui, oui ” と言うのと思った。。。 ②と③の答えはフランスでちょうど逆の意味に理解してしまう。先ず相手が言っていることに注意しないし、早く止めてもらいたいということである。そしてあいづちをいうときにも声の出し方も決まっている。また相手の言っていることを分からない時にも、あいづちで理解させて、「もう一度おっしゃって下さい」、とか「繰り返して下さい」とは言わない。「ハ?」、「エ?」とか、またあいづちなしで理解させる。

また、おじきも日本人の会話においてはたいせつな要因である。挨拶する時、お礼を言う時、謝る時などに使う。例えば先生に遅れてしまったレポートのことであやまる時におじきせず、とくに二染な格好すれば、先生は学生のまじめさ、その誠実さをきっと疑われてしまう。フランス人にとっては形よりも言っていることの内容の方が大切である。日本人の話し方について R. BARTHES 氏のことを言う：“ . . . il se trouve que dans ce pays l'empire des signifiants est si

vaste , il excède a tel point la parole , que l'échange des signes reste d'une richesse fascinante en dépit de l'opacité de la langue, parfois même grâce à cette opacité. La raison en est que là-bas le corps existe , se déploie agit se donne sans hystérie sans narcissisme, ... ce n'est pas la voix qui communique , c'est tout le corps (les yeux, le sourire, la mec he, le geste, le vêtement)' (10)

又、木下氏がこういうことをいっている：「日本人の会話—例えば電話—は多くの場合にかなり長い挨拶、または前置きがあってはじめて本論に入る。欧米人の会話にも同様の要素がないわけではないが、はるかに短い。友人トノ打ち合わせの電話が「先日は御馳走様でした。あの時はづい気持ちになって。。。 」という挨拶で始まるというようなことは、彼らの場合には先ず考えられない。」

その時に本人に感謝を表せば十分であるし、それから「御馳走様でした」とは言わない。「その日はとても楽しかった」と言うけれども食事に対しては何も言わない方がよい（食事の間以外）、失礼であって、何らか「食事をするために来た」わけだと思われてしまう危険がある！

2・5・ 不明確さ、曖昧さ

木下氏は「日本人隅々まで明確にもの言うことを好まない。この点で、欧米人は「日本人の発音は墨えに似ている。」と評することがある。「墨絵は空白に情趣がこめられており、それを味わえない者には分からない。それと同じように、日本人と話す時には、いつも<言葉で表現されない部分>を読まなければならないのだが、どう読んでいいのかわからない場合があって困る。。。 」と書いた。

このように日本人ははっきり物を言うのは好まない。例えばよく「ぐらい、ほど、ばかり。。。 」と思う。。。 かも知れない、きっと」等を聞く。買い物する場合、「りんごを下さい」、「いくつですか」と聞かれると「いつつほど」というような答えは珍しくない。と言うのは相手にプレッシャーを与えないので、曖昧的な言い方するわけである。

日本の文書はよく一時停接統詞で終わっている。例えば①「私山下と申しますが。。。 」②「すみませんけど窓を閉めてくださいますか」、③「はい、おりますけど。。。 」、④「あのお、ちょっとお願いがあるんですが。。。 」、⑤「実は今日お話ししたいことは。。。 」、⑥「もう、そろそろ出かけないと。。。 」、⑦「お茶が入りましたけど。。。 」等の例において、①の例には謙遜を表し、②、⑥、⑦の例には相手に知らせたいことがあるけど、あまり強調したくない、相手を困らしたくない。③、④は質問を表す。つまり「けど」は「お呼びしましょうか」と言う意味で、「が」は「聞いて下さいますか」と言う意味である。そのためらう表現は、まだいいたいことは、はっきり決めていないか、それとも上の人に対する制限を表す。⑤は「en fait」の約ではなく、これからテーマに入って、前の前口上が終わったと言う印である。「しかし。。。 」とか、「さあ。。。 」と同じ事である。又会話の中に日本人は曖昧さを好む。例えば「あれです」、「ああ、あれですか」のような表現ついて、「これ」か「それ」は話し手が参照したいものを示す。「あれ」は相手と話し手は共通な知識を持っていると言うことを前提とする。又「ちょっと。。。 」と言うのは "un peu" か "un moment" の同等なものではなく、①「その日は、ちょっと。。。 」、②「あのお、ちょっと。。。 」の場合も困ったことを表している。①は「。。。 都合が悪い」と言う意味で、恥ずかしさか丁寧さを

表している。②は「お願いがあるんですが」と言う意味で、同じ気持ちを表す。同じように「これで私は。。。」、「じゃ、ぼくは。。。」、「じゃ、私は。。。」と言う

表現を立ちながら言うと「失礼いたします」と言う意味で、「帰ります」と言う意味である。

全く日本人の考え方を知らないフランス人にとって、日本人の曖昧な話し方はとても慣れにくいことであると思う。先ず誤解しやすく、それから非常に冷たい感じがして、お互いの信頼はないかと思われてしまう。フランスでは同じ話し方がある、曖昧、偽善てきな、皮肉的な話し方をする場合もある。けれども友達と使う話し方ではなく、あまり気がいらぬ人と使う。

例えばこの間友達から手紙が来て、彼女が私にお願いして、最後に「翻訳を書いてくださる紙は何でも結構です。」と書いてあった。彼女に最初にアンケート用紙を書き込むように頼まれた。実は彼女はフランス語が分からないので、そのアンケートの返事の翻訳も書いてあげるのとは当たり前のことと思うが、私のことならば先ず直接にお願い表してから（「悪いですけど、もし時間があれば、翻訳も書いてくださいませんか」等）、礼を言うと思う。彼女はこの命令的な願いの仕方をして、礼を言わずに手紙を終わっている。驚いた。

2・6・ 日本語の単純性と精密さ

上記に日本人は本題を話す前によく形式的なことを言うと言った。しかし、ある場合にとてつ簡単な言葉だけでよく表現出来て、便利である。例えば「どうも」と言う言葉は色々な意味で使われている。①「きのうは、どうも」、②「私はどうもう。。。」において、①は謝ることか感謝することを表す。フランスでは同等なものはない。

ちを表している。「雨にふられた」とか「あの人に死なれた」と同じである。

又①「こわれました」と②「こわしました」はかなり違う。自分の責任を認められる時に使う。実は自分を責めることは日本人の一つの丁寧な表し方である。例えばこの間スーパーへ買い物へ行ってお金を払う時、偶然に十円を落ちたら売り子は「ああ、すみません」と私同時に言った。「どうして謝るんですか」と聞いたら「お客さんはお急ぎのようで、私はかなり遅い。。。」と答えた。その時に私は急ぎなかったし、しばらく間に彼女の前に置いてあった物を見ていたのである。又非常におかしいと思った。

又プレゼントをする時にも、よく「つまらないものですが。。。」という。フランスでもそれを言う場合があるけれどその時には本気で言っているか、冗談をいう時にいうので自然ではない。私は「つまらないものですが。。。」と聞くとあまり不自然なので、半分の喜びはなくなる。

結語

ここの書いた言語習慣は第一章に述べたようにい歴史的原因によるが木下氏によると「。。。根本的にあ日本の地理的環境に由来するものと思う。江戸末期か明治ノ初めまでは私達の国は四面の海によってほとんど世界と隔絶されていた。このことが。。。日本人の言語習慣を決定的に支配したものの。。。せまい四の島で同族が鼻つき合わせて暮らしていれば、異を立て角つき合わせぬこと、みんなに同調することが生活の知恵とされるのは当然の成行きであろう。」(1)と述べている。そのために理屈よりも相手の感情に重きを置く応接法と言ってよかろう。個人的な意見であるが日常会話においてフランス人のようにあまりユーモアを使わない。決まり切ったの表現と同じように冗談を言うのもコミュニケーションは簡単になると思う。

木下氏によれば「。。。<外部から隔離はかなり昔一明治以前一の話しなのだが、そのころに日本の社会に定義した言語習慣が、相応の変化は受けながらも根底の部分ではほとんどそのまま残っているの。。。しかしいまや二つの事情が日本人の言語習慣の変革を迫りつつある。一つは情報量の激増、もう一つは国力の進展にもならう国際化の急展開である」(1)と述べている。彼によると生活のテンポが速くなったために事務処理を迅速的確にする必要があり、そのためにも情報の効率化が要求されているので事務処理の能率をあげるために敬語表現を整理し、挨拶、前置きをきりつめるばかりではなく、遠まわしで間接な表現を避けて直截簡明にものをいう。また、国際化を行なうと思えば、まず国際的議論や発言をせざるえないし、国際的なばで発言をするために外国語の心得がなければならない。

しかし外国語を習うためにまず外国人に心を開けること、個人的人間として相手の外語句人とコミュニケーションを取る動機が必要である(ただ相手を利用するばかりではなく)。

実は「どうして英語を習っていますか」と聞くと、よく「英語が好きですから」、「私のために、良いことだから。。。」、「みんな習っていますから。。。」と言うこたえが来る。又、「私は英語は出来ないで外国人とコミュニケーションしにくい」と言う人も多い。だが、私の考え方では、問題は実は逆なんである、つまり外国人(自分の属するグループでない人と)とのコミュニケーションは出来ないで、英語もどしてもうまくなれないのであるだろう。それで、ことばという要素とそのつなぎ方の規則を習得しただけでは自分の考えを誤りなく、伝えることは出来ないし、相手のいいぶんを正しくうけとることも出来ない。その言語を母国語とする人達のものの考え方や意思伝達のパターンー言語習慣ーをしり、それにのっとって発言し、またそれを念頭において相手のいいぶんを聞かなければならないのだ。そこで相手に訴えて「理解してもらおう」ことではなくて、相手を説得することと思う。欧米人に対する交渉でこちらのいいぶんを通すには客観的な根拠もとづいて相手を論理的に屈伏させるほかないことを強調したが、そのためにはまず隅々で明確にズバリとものをいう訓練が必要だ。

国際的な面だけではなく、個人的な面でもそうだ。よく「日本人は等質の族人だから相手と話しなくてもお互いの理解が出来る」という。しかし、かならずそうではないと思う。誤解が多いただ「和」のために問題を解決しないまま、現実を無視するだけである。その上に直接に気持ちを表さない方がいい場合があるかも知れないが、ある程度には言いたいことをずっと黙っていると、フラスト

レーションを受けて、精神的に危ないことじゃないかと思う。それから、そのために、お互いの関係も悪くなるだろう。。。私の目から見ればこう言う体動はコミュニケーションと言えないし、お互いの頭は良ければ（階級、年、位置などに関係なし）冷静にお互いの心（考えていること、感じていること）を聞いて、話し合いすれば（お互いの尊敬があれば、自由に、冷静的話せるべき）、必ず合理的な解決を見付けるべきであろう。

この間わたしは日本の友達に傷つけられて、彼女は何も気がつかなくって、説明してもきっとわかってくれないだろうと思った。けれども、しばらくすると彼女がおかしくと思って、私に聞いた。大変用心して、彼女の私にたいする行動批判をせずに、お互いの理解のために、お互いの心と考え方を知る必要だから、それからこのような「誤解」、「喧嘩」は悪いことじゃなくて、良い事で、コミュニケーションを進めるようにひつようなことだと説明した。けれども彼女は自分の考え方も何も表しないで、落ち込んで、話しはそこで終わってしまった。フランス人にとって同じような会話は毎日行なうことだが、その時に自分傷つけられても、話し合いを通じてしばらくすると気分は直るのである。日本人の場合には一度口論すれば、その関係のおわり場合が多い。

最後に、私達も日本人に勉強出来る所があると思う。例えば、相手をよく聞くこと、相手の心をあまり傷つけないように私達のはなしかたをもうちょっと穏健であるようにすることなどである。

@@@

注意

- (1) 木下是雄 「日本人の言語習慣を考える」, 中央公論1986年9月号
p224, 226, 228, 230, 231, 233
- (2) R. SIEFFERT 'La Littérature Japonaise', POF 1973
p11, 12, 13, 14
- (3) 周一加藤 「現代日本語の根源」、日本人の心-1987
p86, 88
- (4) T. KAWASHIMA 'The Status of the Individual in the Notion of Law, Right, and Social Order
in Japan' THE JAPANESE MIND, CH/E. TUTTLE Cie-1980
p92, 264, 265, 266
- (7) 土居健郎 「甘えの構造」 弘文堂-1973
p58, 75, 112
- (8) C. NAKANE 'La Société Japonaise' . U. PRISME-1974
P34, 41, 44, 122, 158, 161
- (9) 深代惇郎 「天声人語」 8<アナウンス>・朝日新聞社-昭和48年
- (10) R. BARTHES 'L' Empire des Signes'. SKIRA-83-1970
p18
- (5) O. MIZUTANI 'Nihongo notes' 1~5 -THE JAPAN TIMES-1988

参考文献

1. P. CHAUCHARD 'Le Langage et la Pensée, QUE SAIS-JE-1983
2. 鈴木孝夫 「ことば と 文か」、岩波書店-1970
3. 木下吉雄 「日本人の言語習慣を考える」、中央公論-1986年9月号
4. M. COULTHARD 'An Introduction to Discourse Analysis', LONGMAN-1985
5. C. HAGEGE 'La Structure des Langues', QUE SAIS-JE-1982
6. O. MIZUTANI 'Nihongo Notes' 1~5, THE JAPAN TIMES 1988
7. C. NAKANE 'La Société Japonaise', U-PRISME-1974
8. 広報企画屋 「日本人の心」、丸善株式会社-1987
9. 南博著 「日本人の心理」、岩波新書、1989
10. A. MOORE 'The Japanese Mind', CH. E. TUTTLE Cie-1980
11. 土居健郎 「甘えの構造」、弘文堂-1973
12. 現代死相「日本人の心の歴史」、青土社1983年9月
15. 中根千枝 「タテ社会の人間関係」、弘文堂-1974
14. 木村 「人と人之間」、弘文堂-1986
15. 土居健郎 「裏と表」、弘文堂-1975
16. R. BARTHES 'L' Empire des Signes', SKIRA-1970
17. R. SIEFFERT 'La littérature Japonaise', POF-1973
18. R. OKABE 'Cultural Assumptions of East and West'.

文献目録

1.	言語習慣の定義	p 1
2.	言語習慣の言語	p 2
3.	思いやり	p 3
4.	調和	p 3
5.	不定の答え	p 4
6.	儀礼的な文句	p 4
7.	討論	p 5
8.	お礼、誤り方	p 5, 7
9.	挨拶仕方	p 6
10.	ひとの呼び方	p 6
11.	人称代名詞	p 7
12.	甘え、依存性	p 7
13.	他人	p 7
14.	利己的	p 7
15.	お世話	p 7
16.	感情	p 9
17.	コミュニケーションの形	p 9
18.	繰り返すこと	p 9
19.	電話	p 10
20.	曖昧さ	p 10
21.	墨絵	p 10
22.	一亭接続詞	p 10
23.	お願い	p 11
24.	責任感、罪悪感	p 11
25.	ユーモア	p 12
26.	国際化	p 13
27.	事務処理、情報	p 14
28.	誤解	p 15